

## ★★★樋野先生 お誕生日記念号★★★

「精神的デフレが進む現代 ～ 総合ビジョンを問い直す機会～」

新渡戸稲造記念センター センター長  
 順天堂大学 名誉教授  
 一般社団法人 がん哲学外来 理事長  
 「明日を考える会 ～次世代の社会貢献～」  
 会長 樋野興夫

ニュースレター第12号が、私の誕生日（3月7日）発行される運びとなった。編集人：田口謙治氏の心温まる配慮である。先日の『現代の肖像』（アエラ 2020年2月24日号 page 52-57）と『癌研時代の連載『内なる敵～いかにして癌は起こるのか～』（いのちのこことば社発行1992年）が、最近さりげなく話題になっているようである。

また、『著書の紹介』（第80回「心に咲く花会」kokoronisakuhana.life/）には、「『われ21世紀の新渡戸とならん』（イーグレブ発行2003年）は、樋野興夫先生が日本学会事務センターの広報誌『Scientia』に連載した文章をまとめたもの。序文の中で、樋野興夫先生は『所詮われわれには、死ぬときは「畳1枚ほどの墓場」しか残らない。



「勇ましく高尚なる生涯」の生き様を見せるしかない。精神的デフレが進む現代、「愉快地に過激にかつ品性」を合言葉に…新渡戸稲造と吉田富三（がん病理学者）の総合ビジョンを問い直す機会になれば幸いである。



がん哲学の普遍化の第1歩である。樋野先生は、すでに2001年から『がん哲学』を提唱されていたのである。）と紹介されている。

新訂版『われ21世紀の新渡戸とならん』（2018年）では、「【序文】：思えば筆者の人生は、小さな村での少年時代の原風景、浪人生活での人生の出会い、学生時代の読書遍歴（内村鑑三・新渡戸稲造・南原繁・矢内原忠雄）、癌研での『病理学（吉田富三・菅野晴夫）との出会い』、アメリカでの恩師『遺伝性がんの父：Knudson』（1922～2016）の『学者の風貌』との出会いが、根幹にある。まさに『人生邂逅』の『非連続性の連続』である。」とある。まさに、今回は、貴重な「誕生日記念号」となる。

## ～「具眼の士」出よ～

お茶ノ水メディカルカフェ・ファシリテーター 森本和滋

- ①『がん哲学者とは、「高度な専門知識と、幅広い教養」を兼ね備えている人物で、複眼の思考を持ち、視野狭窄にならず、教養を深め、時代を読む「具眼の士」である。』
  - ②『単なる肩書きでは、人の魂を揺さぶる言葉は語れない。練られた品性、人格そのものから、人を説得する言葉が発せられるのである。』
  - ③『このような時代にあつて自己を見つめ直し、個人のアイデンティティーを確立することは、時代の要請であると感じている。』
- 2月22日の午前11時からのOCC3階会議室で「がん哲学」樋野興夫著（92～93頁）を3名の仲間と一緒に声を出して読んで、其々が感動した箇所を列記した。

「明日を考える会～次世代の社会貢献～」にぴったりの樋野語録であると考えた。「がん哲学」読書会は、2012年10月27日（第1回）、2014年9月20日（第2回）、2018年3月3日（第3回）。私は、2015年4月棚瀬裕文さんから世話人を引き継いだ。樋野先生との出逢いは、2011年12月18日のお茶の水メディカル・カフェ開設準備シンポジウム。樋野語録をノートに書き取り11冊目。WHO本部ジュネーブで4年間勤務していた関係で、特に新渡戸稲造の生き方や言葉には、親近感を覚えている。私は、薬学の巨星・石館守三やFDAレガシー・フランス・ケルシーの生涯を研究し、彼らの遺した「使命感と責任感」をこの10年間、薬学、医学、看護学の学生達に伝えるミッションを続けている。

(日本薬史学会 副会長)

明日を  
考える  
ヒント

「もし愛がなければ、わたしは無に等しい。」（コリント人への第一の手紙 第13章）

「一切れのパンではなく、多くの人は愛に、小さなほほえみに飢えているのです」（マザー・テレサ）